



世界的に見る環境問題

— WCS をめぐって ① —

藤原英司

テキストの誕生日

その日の会場の入りぐあい、定員のほぼ六割でいどだった。一九八一年の秋に取り壊された東京、有楽町駅前の朝日新聞社の講堂がその日の会場で、今思うとあの時が、旧朝日新聞社の講堂で世界の環境問題がとりあげられたさいごだったような気がする。一階のエレベーター前の案内板には「世界の自然を考える講演会」という表示が出されていて、プログラムによれば、その日環境庁の目下参事官が「世界自然資源保全戦略」について解説するほか、千葉大の理学部長、沼戸真教授が「植物と人間」と題して講演をすること、日本野鳥の会の市田則孝氏、多摩動物公園の中川志郎氏、上野動物園の増井光子さんの三人が「パンダなどみる世界の野生動物」について対談することになっていた。その日というのは、講堂が社屋ともども壊される一年前の一九八〇年三月六日で、春はまだ少し先の肌寒い日だった。

プログラムも案内も、一般の人を対象にした講演会の体裁をとっていたが、この日の催しは、じつは世界の自然保護を考える上で非常に重要な意味をもった催し物だった。というのは、その日、世界の各国で一つの同じ目的をもった会合が開かれることになっていて、欧米および開発途上国でも、政府及び王室が総出で一つの「お祭り」をやることになっていた。それは世界の自然を守るために、世界中の人類が足並みをそろえ、志を一つにして行動しようという申しあわせをするもので、そのためのテキスト・ブック

が発表されることになっていたのだ。

そのテキストブックのタイトルは「世界保全戦略」(World Conservation Strategy—WCS)といい、目下参事官が解説するという。世界自然資源保全戦略」というのがすなわちこのWCSのことで、世界の各国では、この戦略書の発表を、できるだけ派手に、鳴り物いりで行うことになっていた。ポルトガル議会では、この日、首相と閣僚が、この戦略書の発表と採択をめぐり記者会見に出席できるよう、重要議案の審議を延期し、後に暗殺されたエジプトのサタト大統領は政府に対して、WCSを手本にしてエジプトの国内環境を保全するための具体的作戦の作成を命じ、インドネシアのスハルト大統領は閣僚に対してWCSの戦略に沿って開発計画を調整するように指示した。インドの女首相ガンジーもインド用の環境保全戦略が開発されるよう望むと述べ、ラオ・B・シンク農相は、政府が国内向け環境保全戦略を作成し、今後特に森林政策を改訂することになろうと述べた。ヨーロッパ共同体(E.C.)の環境局事務総長は、ブラッセルでのWCS発表を記念して、この戦略発表により、捕鯨問題やワシントン条約問題、環境アセスメント問題について新しい計画と行動がとられるきっかけができることを望むと述べた。ストックホルムでは、国際自然保護連合(IUCN)のチエアマン、モリス・ストロンクがWCSのバインダーをグスタフ王に手渡し、報道陣が二人の固い握手に華やかなフラッシュを浴びせた。

そのほか、オーストラリアやニュージーランド、中国、マレーシア、ノルウェー、セ

ネガル、ヨルダン、スペイン、タイ、ソ連、アメリカ、イタリー、ドイツ、フィンランド、ザンビアなど、文字通り地球上のいたるところで、政府高官を交えた盛大な環境保全のための手引書の誕生を祝う催し物がおこなわれた。そして、その模様を世界各地の報道機関が熱い期待をこめて書きたて、放映し、放送した。イギリスのガーディアン、ケニアのデイリー・ネイション、アメリカのワシントン・ポスト、オーストラリアのシドニー・モーニング・ヘラルド、インドのステイツマンなど、この日発表されたWCSをたたえるニュース記事を引用しようと思えば、ほとんど際限なく書きつづけられるといってもいいくらいである。アメリカの、環境の質評議会(CEQ)のチェアマン、ガス・スベスは、WCSについて、当時つぎのような談話を発表した。

「世界各地の指導者が読むべき重要書類についていくつものタイトルをあげる必要はない。WCSこそ、その一つなのだ」

特別衣裳の謎

これほどの鳴り物いりで発表されたWCSの見本は、週刊誌よりひとまわり大きい二二cm×三〇cmのフォルダー入りのもので、前文五頁、本文四六頁、要約二頁、地図五枚から成っている。このフォルダーが私のもとにとどいたのは一九七九年の末ごろだった。パッキングを開けてみてまず驚いたのは、一番上につけていた用紙に書かれた次ぎの文言だった。

「機密書類。一九八〇年三月五日まで」

フォルダーは厚紙につるつるのコートがかかっている上下左右に開くタイプの大層凝ったもので、中を開くと先に記した前文、本文、要約、地図がそれぞれ別々に製本され、いずれもピカピカのアート紙に印刷されていた。フォルダーの表紙を見れば、これが国際自然保護連合と他二つの団体によって作られたものであることはわかるし、何よりもその表題を見れば、これが何年も前から作ることを予告されていたものであることはすぐにわかった。それにしても何とまあ「りっぱな」ものを作ったことかと、しばし見とれた。りっぱなというのは、この場合、内容のことではなく造本のことだった。国際自然保護連合の機関誌は久しく再生紙を使って印刷されていた。今でもそうだが、WCSのフォルダー入り文書は、およそ再生紙のイメージとは裏腹な高級アート紙と上質紙を

ふんだんに使った、じつにぜいたくなものだった。

私はそのフォルダーを見ているうちに、だんだん腹がたってきた。何のためのぜいたくか。環境保全のために森林保護と紙の節約が世界的なコンセンサス(合意)になろうとしている時期に、世界の環境保全の虎の巻ともいえるべき指導書が、このような不動産会社のカタログみたいな、見た目の豪華さを誇示する造りにする必要がどこにあったのか。長年、機関誌に再生紙を使いつづけて、自然保護の理論と実践を進めてきた国際自然保護連合が、自らの活動方針に汚点を残すようなことをしたのはなぜなのか——これが、その文書を受けとった時の偽りない感想だった。

この謎はその後しばらく続いたが、どうやらこれは、国際自然保護連合が、世界の政界と王室を相手に初めて催す大がかりな国際的祭典のための「特別衣裳」であつたようだ。なぜなら、その後、キャンペーン用として送られてきたWCSは、フォルダーもなく、別々の造本も一つにまとめ、紙も再生紙と思われるものに変つたからだ。だが、今でも思うことは、世紀の祭典用なればこそ、なおのこと、もうひと工夫してほしかったということだ。その「特別衣裳」はまだまだ工夫の余地があつたはずだ。例えばフォルダーの厚紙は再生紙で十分厚いものが作れるし、その上を色刷りした再生紙で巻けば、質も見かけも十分祭典用に見劣りしないりっぱなものができたはずである。

こうして私は、はからずも国際的な「機密書類」を受けとった当初から、その書類に批判的に接する立場に立つことになった。

最大の差

WCSの表紙には、次頁の図のような丸囲いの中に大中小の三つの山を配したマークが大きく刷られていた。この三つの山は、見る人によっては魚のワロコのようにも見え、サメの歯にも見え、また矢印の先端のようにも見える。これは今日でもWCSを語る印刷物のほとんど総てに印刷されており、もし国際関係の書類や環境問題の文書、書物にこのマークがついていれば、それは一九八〇年に世界中がお祭り騒ぎをやったWCSを指すか、あるいはWCSを背景とした何か語られているものとみていいだろう。

このマークは青を基調としており、一番小さい山が濃紺、中位の山が紺色、大きい山が青、そして丸囲いの中の余白が薄青に着色されている。マークの意味は、丸がこの地

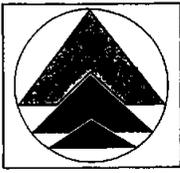
地球上で生命を支え、はぐくむ生物圏を表わし、三つの噛み合った矢印は、環境保全の三つの目的を表わしている。一つはこの地球上で欠かすことのできない生態学的なプロセスと、生命を維持するためのシステムの保全を示し、二つめは遺伝子の多様性を保存する必要性を、そして三つめに種と生態系を維持しながら利用していくことを表わしている。この三つの概念は別に目新しいものではないが、WCSの内容を読むと、そこに提示されたものが、従来の環境保護のテーゼとはだいぶ趣を異にしたものであることがわかる。どこが違っているかを結論的かつ集約的に簡単に言うなら、WCSでは、環境の保全と開発の両方は調和しうるものであり、調和させなければならぬ」ということを強く打ちだしていることだ。

このことについてWCSには、各所にいろいろな表現が見られるが、たとえば、つぎのような記述は保全と開発の調和の重要性をよくいい表しているであろう。

「保全と開発の統合が特に重要である。なぜならば自然資源をも保全する開発パターンが広く採用されなければ、明日の達成を妨げずに今日の要求を満たすことが不可能になるであろうからである」（第一章八節）。

これに続く第一章第九節には、やや長い表現で、つぎのような記述がある。

「保全と開発が組合わされることはめつたになかったので、この二つはしばしば両立しないものと思われ、そして時には両立しえないものの代表とさえ思われていた。事実、その二つは、開発が持続的であることを意図しなければ、両立しない。保全論者自身、全く気づかずにこの誤解を助長してきた。彼等はまた、充分に早い段階に開発プロセスに参加を要請されたことがなかったために、しばしば対立の姿勢をとることを余儀なくされてきたが、保全論者自身が、すべての開発に反対していると思われ、その結果は開発を中止させることがあまりに多かった。その結果は開発を中止させることにはならず、特に開発途上国では多くの開発実施者に、保全は単に不適切だというばかりでなく、有害であり、反社会的であると思ひこませるようになった。かくて、開発は保全論者の妨害なしに続けられ、保全がそれを防ぐ助けとなりえたかも知れない生態学的損傷に起因する開発の最終的失敗の種を蒔くことになった」。



The Symbol

以上で引用した文には、なかなかいいことが書いてある。だが、これをすつと読み流して一度で文意がすべてわかったという人がいれば、かなり国語の読解力がある人だ。私は残念ながら、一度読んだだけではよくわからなかった。とくに、さいこの部分の「かくて」以下のところは、二、三回読まないとよくわからない。

よくわからない例は、ここだけではない。たとえば序論にでてくるつぎの表現はどうであろうか。

「……。これらの欠点は認識されてはいるが、それを中心にして環境保全論者と開発実施者が等しく集まることのできるように、同意された保全要件および優先順位に関する文書を発表し、並びに、国と国、部門と部門、または権益と権益を分けてはいるが絶対してはいない境界に拘束されない保全に関する将来展望を採用する必要性と比べれば、重要性は低いと考えられる」。

以上のいくつかの引用は、国際自然保護連合日本委員会が訳し、環境庁の自然保護局が監修したWCSの日本語版「地球環境の危機」（第一法規出版、一九八一年）からの引用だが、ところどころにこのようなチンプンカンプンな文章がでてくる。WCSの原文を見ると、なるほど日本語にすればそうなるであろうと思われるようなことが書いてあって、訳した人の苦勞が偲ばれると同時に、原文も訳文も、ともにもう少し、どうにかならなかったのかという思いが強い。

座礁した新計画

この思いは、WCSが機密書類として到着した時、読み始めて、まず最初に抱いた印象だった。たとえば「前書き」という表題に「Preamble」と書いてあった。これは肩ひじはった著作や条約、法令などの前文に使うことが多い言葉で、一般的にはPrefaceやforewordで十分なはずだ。

さらにWCSのいたるところに出てくる「implementations」という言葉は、日本語の「遂行」、「履行」に当たるが、「fullfilling」や「accomplish」など、いくらでもやさしい言葉がある。それをわざわざむずかしく書いたところに何か権威主義的なものが感じられて、これは困ったことだと思ひこむ思いが強かった。自分の語学力の不足は棚に上げ、辞引きと首っ引きで、読解に苦勞したことですつかりアタマに

きて、機密書類を一通り読み終えるころには、文字通り「ああシンド。もうたたくさん」という気持になった。

このシンドイ(疲れた)という思いには、四つの懸念が含まれていた。一つは、この文書をいったい何人がさいごまでがまんして読むだろうかということ。二つめに、読んだとしても、ほんとうに中味が理解できるのは何人いるかなということ。そして三つめに、これはへたをしようと、発表されたあと「大変けつこう」と賛意を表されたあと、文書はさっさと書棚かキャビネットに整理されて、いち早く忘れ去られるのではないかとということ。そして、さいごに四つめの懸念として——しかもこれが一番だじなのだが、WCSの内容は環境問題についての国際情勢をかなりよく知っていないと、WCSの重要性も内容が意味する広がりもよくわからないのではないかと、ということだった。

ここで、話は冒頭の朝日講堂の場面へもどる。当日の会場の入りぐあいは、すでに述べた通り、大入満員の大盛況という感じにはほど遠く、閣僚や皇族の参加もみられず、人気も中程度という一般の講演会と大差はなかった。国立公園協会の千家理事長が挨拶に登壇し、その日、今まさに世界の各地でWCSの盛大な発表会が催されていることを力説したが、その熱弁を迎える会場からの盛り上りは全く感じられなかった。続いて環境庁の下部参事官がWCSの解説をおこなった。その解説は、要領よくWCSの内容を要約していたが、WCSの新基本理念ともいべき開発と保全の調和ということに話がおよぶと、会場では、「ほんとにそんなことができるのか……」というささやきが聞かれた。その日は、自然保護活動の第一線で活躍している団体の職員や運動家も多数参加していた。その人たちの間からも同様のささやきもれた。私はその時、WCSが日本へ上陸しようとして、早くも海辺で暗礁に乗り上げたという熱気からはほど遠く、主催者側の力みと参加者側の認識とはずればなしに終わったという感が強かった。朝日新聞はこの日、朝刊第一面の左隅上部に弁当箱でいどのスペースをさいてWCSの発動を報じたが、その後これについての追跡ニュースはなく、テレビ、ラジオもごく些細な報道で当時お茶をにごしたに過ぎなかった。

原典講読

その後、何日かして公明党の機関紙局から筆者のもとへ、WCSについて論壇で書いてほしいという依頼があった。そこでWCSの由来や意義について簡単な論評を書き、それは三月十九日の公明新聞に掲載されたが、WCSに関する紹介は、その後、二、三の自然保護関係の機関誌に簡単なものが出ただけで終ってしまった。私が当初懸念した「素早く忘れ去られるであろう」との予想は、みごとに的中した形となった。

しかし、WCSとやや濃厚なかかわりをもつ三つの機関で、その後、WCSをめぐるテコ入れの動きがあった。一つは環境庁が、いち早くWCSの日本語訳を完成したことで、これはWCSが発表された一九八〇年三月にはタイプ印刷が仕上り、二〇四頁の冊子となって関係者の間に配布された。だが、これは市中の特急翻訳会社が翻訳を請け負ったものだったためか、日本語で書かれてはいるが、高度に「チンプンカンプンで、これを手にした人びとは等しくアタマにきた。

これより早く筆者が所属する日本学術会議自然保護研究連絡委員会では、WCSの「解剖」にとりかかった。すなわち、委員の一人一人が一章ずつ分担して、その内容を検討する勉強会を開催した。順番を割り当てられた委員は、あらかじめWCSの原文を詳細に検討し、次の委員会で、三人ていどの委員が自分の分担した各章を解説、論講する方式をとった。そのころ、日本語の訳はいかなる形でもまだ存在しなかったので、各委員はWCSの原文をそのまま検討しなければならなかった。今でも思いだすのは、その勉強会が、内容の論評というよりは原文の解説に多くの時間が費され、まるで大学の原典講読の講義を久々に聞く思いが強かったことだ。私は国際自然保護連合の環境教育委員会のメンバーであることから、WCSの第十二章と十三章の環境教育に関連ある章の論講が課された。二章でわずか四頁の内容だが、その分担責任の準備にまる一日を費したことを覚えている。

この勉強会でもう一つ忘れられないことは、各委員の間でWCSに対する評価がまっ二つに分かれたことだ。つまりWCSはよくできているとする委員と、WCSは常識的内容にすぎず、序論にかかけられた目的達成のためには、WCS全体が序論にすぎないとする手厳しい批判をする委員だった。私は後者の立場で、国際自然保護連合の委員でありながら、自分の所属する連合が苦心の末に作りあげたWCSをこきおろすのは、はなはだ具合が悪いのであった。

第三の動きは、国際自然保護連合の日本委員会がWCSの正式な日本語版を刊行する計画を立て、一九八一年七月に刊行の実現にこぎつけたことである。それが本稿の初めの方に引用した「地球環境の危機」である。環境庁の先駆的翻訳よりはるかに読みよくはなっているが、既述の通り、極めて難解な表現が散見される。

私は現在、筑波学園都市に住んでいて、何かというと電車で東京へでることが多い。片道一時間半も電車に乗るので、すでに何回かWCSの日本語版を持って出て車中で読んだ。しかし、読むたびに眠けをもよし、たいてい途中でぐっすり眠ってしまう。こんなことでいいのかと自らを励まして再読、三読に挑戦するが、いつも眠くなる。いっばう、国際自然保護連合のスイス本部からは、WCSについて、貴殿はいかなる活動をしてくれたか、という文書が何回も送られてくる。何とかしなくてはと思いつつながら、早くも二年近くが過ぎた。その間、WCSは私の内にたえず生きつづけてきたが、世間一般には、もはやWCSのWの字も聞かれない。自然保護界も、すでにすっかりWCSのことを忘れ去ってしまったようだ。

解説が目ざすもの

ところで私は、WCSの悪口を書くために本稿を書きだしたわけではない。それどころかWCSをより良く知ってもらうために、このシンドイ仕事にとりかかることにしたのである。WCSはその精神において、全世界の環境を考えていくための指針を提示しようとしており、国連は今後十年間の地球環境を保全する計画の行動指針に、このWCSを採択しているからだ。いわば環境問題を地球レベルで考えていこうとする時、当面、世界のコンセンサスがどんなものであるかを知るのに、欠かすことのできないものがWCSであるといえる。

わが国では環境問題を世界的視野でとらえることが不得手な人が多い。その人たちが、多くの国際会議や国際舞台で、環境問題への対応の後進性を暴露する事件が相次いでいる。たとえば毎年のようにむしかえされる捕鯨問題についていえば、日本には日本の事情があるというのが閣僚からマスコミ、はては自然保護関係者の大部分を含む人々のわが国でのコンセンサスであるが、そんな論法はも早、国際舞台では通用しないことがWCSにはつきり示されている(たとえば、第十八章)。

さらに問題なのは、わが国に何年か前からできはじめた大学の環境科学研究科などの部門で、WCSのことをはつきり知らない教官や学生がかなりいることだ。すでに述べた通り、わが国でWCSがすでに水際で座礁したことを思えば、こうした現状もまたやむおえないことではあろう。しかし世界の世論は、日本のそのような状態をけつして、やむおえないではすまさないはずだ。

WCSの原文や構成が眠けを催すものであることは、国際自然保護連合自体も気づいており、そのためにWCSのより一般的な書物「How to Save the World」がWCSの出た同じ年に、ロンドンのKogan Page Ltdから刊行された。わが国でも二年遅れて日本生産性本部から、この本の訳書「世界環境保全戦略」が一九八二年一月に刊行された。この原書は確かにWCS本体よりもわかりやすいが、こうした内容のものは、今日では類書が多い。WCSはいったい他の類書とどこが違うのか。それよりもまず、なぜ世界はWCSなど作らなければならなかったのか。それにWCSを作ったという国際自然保護連合とはいったい何なのか。WCSの表紙に、連合と並んで名前を連ねているUNEPやWWFなど、一般の人には、こうした略号自体がまずチンプンカンプンであるはずだ。そこで、WCSが「出産」される背景となつた世界の情勢や、関連ある機関についてのあたりから、順次、のんびりと解説をすすめることにしたい。

長年論文を読みなれている人々にとっては、私がこれから書こうとしている、いつ終るとも知れないエッセー調のWCS解説は、かえってシンドイものかもしれない。そのような人々には、WCS本文の通読をすすめる。私が書こうとしているのは、もっと初学的な人びとや、自然保護自体を自分とは「関係ない」と思っている人びとを対象にしたものだからだ。なぜならば、WCSの利用者は、商工業や労働組合を含む開発実施者だとはつきりWCSの本文にうたわれており、さらに環境問題の教育は、広く一般の人に対しておこなわれるべきだと書かれているからだ。じつさい、環境保全の問題をもっともよく知ってもらわなければならないのは、環境科学研究科の学生や先生ではなく、環境問題など自分に関係がないと思っている人びとである。私ごとさら論文調を避け、とにかく読んでもらうための世間話を交えたエッセー調での連載を書き始める理由が、これでいくらかわかっていただけないかと思う。

(作家)